東京薬科大学新聞

発行所
東京薬科大学
新聞会
責任者
中道博之
編集者
大林　裕幸
越智　隆夫
川上　博之
川崎　信幸
毛塚　重行
坂　泰弘
中村　昭夫
中山　啓一
永井　和久
牧岡　大器
藤村ゆりか
宮原　勇人
李　英

平成二年 新たなる飛躍に向けて

平成二年度より、学内暦が変更された。その結果、前期試験が夏休み前になり、また、授業日数が若干少なくなった都合上、実習予定が過密になるなど、学生生活に多少たりとも影響が出ることは必至である。さらに、講義の充実を図る目的で、語学クラスが小規模化された。

学内暦変更 ―その経緯

本年度より、学内暦が大幅に変更されたことは、すでに皆さんもご存じのことでしょう。そこで、この学内暦の変更にどの様ないきさつがあったのか説明していきたいと思う。

学内暦変更が学生側に発表されたのは、昨年の十一月八日に開かれた学内協議会の時であった。その変更内容は後述の通りであるが、学校側から挙がった学内暦変更の主な理由として、平成三年三月二十八、二十九、三十日の三日間にわたって行われる日本薬学会が東薬と中央大学を会場にして開催されることをあげた。

変更された点は、クラス、学年、教室、他大学、企業等との関連など様々な点を考慮して作成されたものであり、学生の中には不満を持っている人も多数いるだろうが、一つの予定を変えると他の予定にまで影響が及ぶため、変更するわけにはいかず、その辺は臨機応変に対応してほしいとの事である。

また、学内暦変更の案は、昭和五十八年度から検討されていたのだが、いままでその案が実行されなかった主な理由として、教育棟の冷暖房完備の遅れがあげられる。

なお、この学内暦の変更は平成二年度のみなのか、それとも今後もこの学内暦で続けていくのか、まだ検討中との事である。

学内暦変更 ―その影響

前述の通り、今年度より学部行事等の日程が変更されたが、この変更により、私達学生の活動にはどの様な影響があるだろうか。

まず一番の関心事であろう定期試験の日程変更についてだが、「前期考査が、夏季休業前に終了する為、休暇を大いに楽しめる」「休暇中、試験勉強が出来ないので困る」という、二つの意見が多くの学生から聞かれた。比較的前者が多かったが、東薬生は平生から勉強しているからであろうか。その他「以前にも増して授業や実習が後期に片寄り、負担が増大するのでは」と言う声もあったが、これに関して、数人の先生に質問したところ、「実習などは調整が出来ており、授業の片寄りに関しても心配しなくても良いだろう」とのことである。

又、学生大会定例会開催への影響について、関係者によると「新執行部が発足しておらず詳細は未定だが、日程がつまる事で、以前にも増して忙しくなるだろう」との事。

その他、学術、文化等の各部は、休暇が目一杯使える等の利点を語ってくれた。

最後に東薬祭に関しては、九月中準備が出来る為、各団体の個性的な活動が期待できるとのことだった。

今回の改正により、学生だけでなく、自治会等の諸団体にも影響があると言える。

語学クラス少人数化

本年度から、一クラス五十名ほどで構成される語学クラスが実施されている。

昨年度までは、語学の授業も通常のクラス（約八十名）ごとに行われていたが、授業の充実が難しく、多人数に対する不満の声が多く挙がっていた。事実、過去の学生を対象としたアンケート調査で、回答者の約半数が語学の授業でクラスの人数が多いと答えたという、学生の関心の強さを示す結果も残っている。他校では少人数制の語学の授業をすでに行っているところもあり、本校でも、学生大会や学内連絡会議を経て、平成元年度から、教育棟三号館の完成とともに実施するという計画が立てられた。しかし、工事の遅れによって延期された為、本年度ようやく実現に至った。

少人数化が実行されれば、当然授業中指名される回数が増え、そのことを懸念する内気な（？）学生もいるようだが、緊張感があり集中できると少人数制を高く評価している前向きの意見も少なくはない。また、多く指名されるようになれば予習も念入りになり、一層授業が充実するのでは、という意見もある。

一クラス当り三十名減という大きな前進によって、果してどれだけの効果が表れてくるか、今後大いに注目されるところである。

新厚生施設に学生の声を

昨年十一月二十六日に行われた学内協議会において学生側から出た「学生のための厚生施設を充実して欲しい」という要望が実行に向けて本格的に動き出すこととなった。

この計画は、多目的ホール及び音楽部室に続く久しぶりの厚生施設建設でもあり、今回の厚生施設は部活に参加していない人も含めた全ての学生のための厚生施設となる予定である。

この新しく建設される「厚生施設」には大学側から「教職員と学生との交流の場を作って欲しい」という声も出ており、またどの様な厚生施設を建設するか等の内容については、今までの話し合いでいろいろと意見は出ているが、今後は学校側の代表者と学生の代表者によって「厚生施設建設委員会」（仮称）を発足させ、この委員会の場を持って施設の内容、規模、備品等の細部にわたって話し合いが行われる予定である。

なお、この計画を受けて自治委員会では学生を対象にアンケートをとり、そこで出た希望をもとに、学生としての意見をまとめていく予定である。このアンケートを最大限に利用し、また自治委員会に意見を持っていく等をし、今までの厚生施設にはない魅力を持ったすばらしい厚生施設を我々自治会員みんなで作っていこうではありませんか。

学費値上げの影響は？
新入生五百二十二名入学

今年度の入学試験は、前年度に比べ、男子で百二十一名女子で二百十九名少ない、男子千五百七十四名、女子千四百八十三名が受験、男子四百四十三名、女子三百四名が合格し、最終的に男子二百九十八名、女子二百二十四名が入学した。

本年度は、先に述べたように受験者に減少が見られるものの、合格者は前年に比べ増加した。（男子三十六名、女子二十一名）得点は男女とも最高点は二百四十九点で、男子では昨年の二百七十九点に及ばないものの、女子では十点の上昇となった。だが女子では逆に最低点が昨年の百七十点から百四十九点へと減少し問題の難化がうかがえる。

出身地域別ではやはり東京の大学である為に、都内、埼玉、千葉、神奈川を中心とする関東地方が多く、次いで中部、近畿の順になっている。

また出身校別では、神奈川県立相模原高校の九名（男四・女五）が最高で、ついで東京都立八王子東高校の七名（男三・女四）となっている。

学費値上げの影響であるが今年度の募集要項は、昨年の九月頃配布となり、値上げ決定が十月であったため、入学志願者に別途、学費値上げの通知があったが影響は少なかった。だが平成三年度については影響があるものと予測されている。

新自治委員会議長あいさつ

児玉実章

自治委員会なるものは、本来一般学生にとって最も身近な存在であるべきである。しかしどうしたことか今や最も遠い存在であることを否定する者はいないであろう。

学費問題、学内暦変更、駐車場問題、バス増発、等々。この中で事前に協議のあることを知り、また意見を述べることが出来た学生はわずかなる数である。現実に、大学から学生自治会に対し学生の意見が求められた時、学生に情報を伝え全学生の総意をまとめるという本来の機能は数年来停止状態であった。

この記事を皆さんが読むころには厚生施設アンケートが配られていると思う。今年は情報伝達、意見集約の最低限の仕事から再出発した。

何も意見が出ない時、かつては独断で妥当と思う意見を補足したが、今年はしない。

本来の姿とは全学生が発言の義務を負うことでもある。

薬味

大学生にもなると中学、高校時代の友人が結婚するという便りを耳にするようになる。▼この前、家に届いた招待状になかなか風変りなものがあった。時折、返信用葉書の宛名に〝行〟と入れずに〝様〟と印刷されていることがある。これは少しでも相手方の手間を省こうということから行われているものだ。今回届いた招待状はというと、新郎新婦の挨拶が今までには見たことのないタイプの文章が印刷されていた。『新郎‥「僕の奉仕の精神がこの結婚へとなりました。」新婦‥「すてきな人を待ちくたびれてこの人に決めました。」さてどちらが正しいか確かめに来て下さい。』というものであった。▼今までは（今でも？）こういった挨拶は結婚式の招待状としてはタブー的存在であったと思う。しかし、実際のところこの〝タブー〟の使われている招待状を目にすると、非常におもしろいものになっている。年輩の方々の中には、この招待状を手にしたとき眉をひそめる方もいるであろう。しかし、筆者としてはこの様に受け取ったときに心を和ませてくれる招待状を歓迎したいものである。▼結婚式でも風変わりなものが行われている。式は普通通り始まるものの、お色直し等の時間のかかるものは行わずに短時間で終了してしまうのである。当の二人は早々にその場を引き揚げ、二次会と称して開かれる別のパーティー会場へと移動してしまうのだ。二次会といってもその実態は彼らの友人のみを集めたものであり、形式ばったところはない。主役が去り、後に残された親戚一同は久々の再会に話に花を咲かせているのである。その場に居合わせてみると、すっきりまとまっているように感じる。主役の二人にしてみれば、普段近くにいる友人達にも祝福してもらいたいのだろう。これだけ好みが多様化してきた現在、もっと工夫を凝らしたものが増えてもいいと思う。

新入生をむかえて

四月初めから約一月にわたり、新入生に学校に慣れ親しんでもらう新歓行事いわゆる「新歓」が行われた。

最初に行われたのは毎年新入生に好評な、新歓祭実行委員会の主催による「新入生歓迎キャンプ」で新入生と上級生の和が築かれた。

そのほかにも各部門主催の行事が多数行われた。

雨で柚木の街を歩きまわることは出来なかったものの、「柚木オリ」もまずまずの成功を収めた。

「春展」は個々のクラブの力作が多数展示され談話室を訪れる人たちの目を楽しませていた。

また、「音楽祭」も行われ、各音楽系クラブの熱演に魅了される人たちも多かった。

「学術発表会」においては興味深い発表が行われた。

なお、五月十二日にはマラソン大会が行われる予定である。

キャンプ

四月二日から四日にかけての三日間、『東薬生の人と人とのつながり』を合言葉に大学セミナーハウスで新入生歓迎キャンプが行われた。

まだ大学に慣れてない新入生たちの多少不安気な雰囲気をほぐすかのように、キャンプは開会式から愉快に行われた。会場がセミナーハウスに移ってからも和やかな雰囲気は続いた。

最初は人の名前を覚えるのに必死だった新入生たちも翌日には『仲間』をニックネームで呼ぶほどになっていた。この日には一部の班が入浴できないなどの不手際も生じたが、全体的にスケジュールは円滑に進んだ。

二日目の夜はほぼ全員が徹夜で遊んでいた為か、閉会式では皆眠そうな顔をしていたが、充実した三日間は良い思い出になったことだろう。

柚木オリ

去る四月七日、「柚木でデートしよう」というテーマの下、第七回柚木オリエンテーリングが、学術部門の主催により行われた。この「柚木オリ」は毎年、新入生に一日でも早く大学生活に慣れてもらうために行われている。

例年、柚木の街を歩き回るのだが、今年は暴風雨の為、キャンパス内でオリエンテーリングを行った。柚木オリ始めて以来七回目にして初の雨天ということで、スタッフは予定変更など大わらわであったが、スムーズに事は運び、大変有意義な日となった。

最後に、春原柚木オリエンテーリング実行委員長は、「友達や先輩とともに目標を持ちすすんでもらいたい」と語り柚木オリは終了した。

春展

文化部門主催の春展が、四月十日から十三日にかけて談話室で行われた。

参加団体は、やきものクラブ、美術部、写真部、華道部の四団体。それぞれの団体から出品された作品はどれも力作、秀作揃いで談話室を訪れる人達を楽しませた。

この春展、新歓祭のイベントの一つとして開催されたものであるが開催される時期と場所のアピールが少なかったのか、気になる新入生の入り具合いは今一つといったところ。しかし春展は終わったものの各団体の部室にはまだまだ力作があり、見学に行くのもよいだろう。

音楽祭

去る四月十四日（土）に、談話室及びコミプラにおいて新歓音楽祭が開かれた。参加団体は、ギター、ハルモニア管弦楽団、合唱、軽音、ジャズ研の五団体で、それぞれ十〜二十分程度の持ち時間で発表を行った。

各クラブとも力の入った発表で、土曜日の午後にもかかわらず、新入生の他に、上級生、院生までもが熱心に聞き入っていた。

なお、コミプラでの演奏の音が大きすぎ、南陽台の住民から苦情がきた点について、来年度からの対応が要求される所である。

学術発表会

去る四月二十一日、111講義室において第十一回学術研究発表会が開催された。これは新歓行事の一環として行なわれたものであり、各学術系クラブが、春夏の実習で得た成果を新入生に披露すると同時に、参加者の投票により発表の審査が行なわれた。投票の結果、分析化学研究部が優勝、準優勝に植物研究部、そして特別賞として生化学研究部が選ばれた。

式の運営に一部不手際な点が見られた事と、会場内が騒がしかった事が残念であったが、内容はどれも興味深く、学術系のクラブへの入部を考えている新入生には大変役に立ったのではないだろうか。

論説　医薬分業の再考を

「医薬分業」を推進する為のモデルとして設立された小平調剤センター薬局が休業した。（この件に関しては下の記事参照）この事は本校が出資していた事もさることながら医薬分業という面で我々薬学生、又薬に直接あるいは間接的に関わる可能性のある人間にとって重要な問題であることを認識して頂きたい。これは「医薬分業」を目指すにあたり、日本の医薬業界の体質を如実に現していると思われるからである。この際我々はもう一度「医薬分業」について認識し直してみる必要があるのではないだろうか。

医薬分業とは端的に言えば医者が診察をして処方箋を出し、それに基づいて薬局薬剤師が医薬品を供給するというもの。この方式は先進諸国に於てはほとんど行われているものであり、我が国でも法的に確立してから三十余年の歳月がたつ。が、事実上その法律は名ばかりで実際にはほとんど行われていないばかりか、たてまえ上分業しているものの病院と薬局の経営者が同じである第二薬局というものまでがでてくる始末である。その為薬価差益による利潤追求主義の一部の病院により必要以上の薬を投与される、いわゆる「薬漬け」の患者がでたり、複数の病院を利用する「かけもち通院患者」はもらう薬が重複して副作用に悩まされる等といった弊害が問題となっている。医薬分業が確立されれば薬を病院の利潤追求の場から引き離すことができ、必要量以上の薬を投与される事がなくなる上、薬局で個人の薬歴を管理することにより薬の重複を防ぐと共に患者に合わない薬が投与されることを未然に防ぐことが出来る。これだけメリットの大きい医薬分業ではあるが事実うまくはいかない。その原因として一つには漢方医療を源とし、医師即ち薬師であった我が国の医療の歴史的経緯。また一つには薬価差益が医療機関の収入となっている現実が挙げられる。しかし人間の健康、そして生命を扱う医療という聖職に経営上の思惑が入り込むことなどそもそも許されることではない。三権分立のしっかりしていない国家が国民に良い生活を与えられないのと同様、医薬分業の確立していない国の患者は患者本意の医療を受ける事はできないのである。我々は医薬分業への道をしっかりと見つめると共に、それに必要とされる薬剤師の資質と意識の向上という題目に臨んで行かなければならない。

（矢部健二）

消滅!!　百台駐車場

現在、東京薬科大学には学生用の駐車場として百台駐車場と生協駐車場の二つが設けられている。ところが、一号道路開通に伴い百台駐車場が廃止されるため必然的に百台の自動車があぶれることになる。

百台駐車場が廃止されるとなると、数多くの自動車通学者は、ただちにその影響を受けることとなり、通学に支障をきたす者も多数出るであろう。そこで事態を重くみた法人・大学側は、交通問題検討委員会を組織し、当問題に関して検討を重ね、その結果として次の二つの場所を駐車場にしてはどうかという案が提出されている。

①百台駐車場の南側

②生協駐車場近隣の土地

だが、現段階では問題解決には至っていない。問題解決に向けて更なる努力を委員会に望みたい。また、地主からの要望により、生協は、生協駐車場の駐車料金値上げを予定している。こういった状況から、自動車通学をしている者や、これからしようと思っている者にとっては厳しい事態となった。

当面この問題は、交通問題検討委員会を中心にして検討されるが、学生に直接かかわる問題であるから、学生側は委員会に対してもっと自分たちの声というものを反映させていってもよいのではないだろうか。

前途多難？　医薬分業

平成二年二月二十八日、我が東京薬科大学と小平市薬剤師会の共同出資により小平市の公立昭和病院前に設立された小平市薬剤師センター薬局が、経営不振のため開業八ヶ月にして休業の憂き目にあった。

同薬局は薬剤師の悲願であり厚生省推進の医薬分業の考えに沿って設立された、いわば医薬分業のモデルであり、薬剤供給業務の不円滑な状態が継続しその解決に苦慮していた公立昭和病院からの院外処方箋を期待して設立されたものであった。しかしいざ開店してみると院外処方箋はほとんど無いに等しいような状態であり、事実薬局の採算ラインである一日百五十枚に対し月平均三十枚足らずという話にならない数であった。この数字は、当てにしていた公立昭和病院が院外処方箋を多く出すと減収につながる面があるために積極的に院外処方箋を出そうとはせず、希望のあった患者のみにしか出さなかった事が原因のかなりのウェイトを占めているようだ。

同薬局休業に至る本学内の動きを見ると、設立を推進した湯本芳雄前理事長が薬局の赤字経営の続く中、平成元年十二月二十三日に辞任。それに伴い後任の永井国太郎理事長は将来にわたり目的達成の見込みなしと判断、平成二年二月二十八日をもって会社からの撤退を決意、その旨を株式会社小平薬局センターに伝えた。三月十日開催された第十五回理事会に於て、薬局設立に参加を認めた理事全員は辞任し、続いて開かれた第十六回理事会に於て、薬局整理に伴う今後の事務は新理事長に一任された。

今回の失敗に於て経済的な問題もさることながら医薬分業推進の流れの中、分業への意気をそぐことになるのではないかと懸念される。

薬剤師国家試験　結果速報

	新卒	既卒	合計
本学	94.59%	50.00%	89.76%
全国平均	89.46%	59.96%	85.26%

編集後記

今回は偉大なる黒木編集長が、編集後記を短くしようと言いましたので大変短くなってしまいました。はっと気が付くと、もう書くスペースがありません。

（さあしゃ）